－熊本県－

地元に愛される漁場づくり

－砂川天然大和しじみ－

松橋小川漁業協同組合
岡﨑　和恵

１．　地域の概要

熊本県宇城市は、面積約 189 ㎢、人口約５万人の県中央部に位置するという地理的条件に恵まれた都市である（図１）。野菜や果物などの農業が盛んで、自然に恵まれており、市中南部には砂川が流れ、八代海に注いでいる。その八代海は球磨川など多くの川が流れ込む栄養豊富な豊かな海となっている。

図１　位置図

２．　漁業の概要

私が所属する松橋小川漁協の主な漁業種類は、干潟で行う「ヤマトシジミとアサリの採貝漁業」で、正組合員数は 33 人である。

３．　研究グループの組織と運営

松橋小川漁協は、正組合員 33 人、准組合員 65 人の計 98 人で構成されている。

組合としての主な事業はシジミの一般開放潮干狩りで（図２）、砂川のシジミは大きくておいしい、干潟体験も楽しいと、大変好評である。

図２　シジミの一般開放潮干狩り

４．　研究・実践活動の取組課題選定の動機

シジミ漁の一般開放で得られる入漁料収入は、組合の経営を支える一助となっていた。

ところが、令和３年頃にシジミ資源が急激に減少し、それに伴い来場客数も減少した。

グラフが示す通り（図３）、年ごとの入漁料収入は、かつて平均 500 万円ほどあったが令和３年には 100 万円にまで激減した。一般開放の来場者からは、「潮が上がるまで

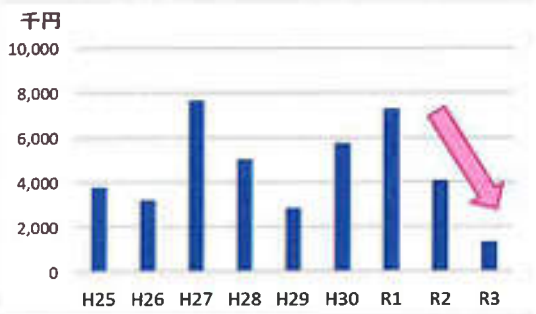

図３　一般開放入漁料収入金額の推移

出典：松橋小川漁業協同組合決算書
漁業権収入等を一部含む

粘っても、籠いっぱいには全く採れなかった。金を返せ！」と苦情が出るほどの深刻な資源状況で、この状況が続けば事業の継続に重大な課題が突きつけられると認識されていた。

このため、私たちは「何か手を打たなければならない」と強い危機感を抱き、令和３年より次に紹介する資源回復に向けた活動を開始することとした。

５．　研究・実践活動の状況及び成果

（１）　環境改善（令和４年～現在）

「環境を改善しなければシジミ資源は回復しない」という認識のもと、底質改善に取り組んだ。具体的には、漁場を耕耘して底泥に酸素を送り込む措置を講じ（図４）、さらに底質改良剤として「フルボ酸鉄シリカ」を散布した（図５）。また、従来から行っていた漁場の清掃活動も強化して継続した。さらに、河川に流入する水系への栄養供給源（ミネラル分）の改善を図るため、山林においてクヌギなどの植林活動への協力を開始した。

図４　海底耕耘状況

図５　底質改善剤散布状況

（２）　生息状況調査と資源管理（令和４年～現在）

シジミの生息状況を調査し、資源を管理する目的で、新たな取り組みを開始した。

従来から産卵期（７月～８月）は禁漁としていたが、これに加えてモニタリング調査を導入した（図６、図７）。また、砂川の隣接河川である八枚戸（はちまいど）川に生息するシジミをより成長に適した砂川へ移植するなど（図８、図９）、積極的な資源増殖に努めた。

図６　モニタリング調査状況

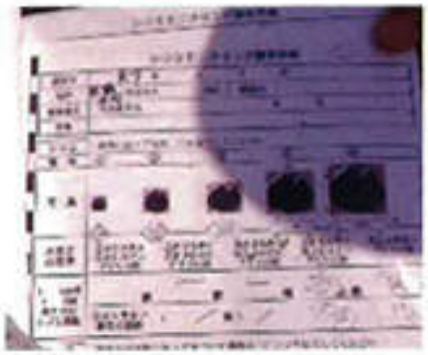

図７　調査結果の記録状況

図８　移植用のシジミ

図９　シジミの砂川への移植状況

（３）　食害生物対策（令和３年～現在）

令和３年に、食害原因を究明するため、クロダイ（チヌ）の解剖調査を実施したところ、腹部からシジミが大量に検出され、食害の深刻さが明らかになった（図 10、図 11）。

この結果に基づき、令和４年からは試験的な網の設置により状況を調査しながら、クロダイの駆除を進めた。

また、空中からの食害生物であるカモ類に対しては、河岸を横断するようにテグス（釣り糸）を張り、カモの飛来を妨げることで、シジミ資源の保護を図った。

図 10　調査用に捕獲したクロダイ

図 11　大量のシジミが確認された
クロダイ腹部の開腹状況

（４）　知名度アップ（令和６年～現在）

リピーター以外の新規顧客を獲得するため、まずは「砂川天然大和しじみ」の認知度向上を図る必要があった。

「砂川ってどこ？」「シジミなんて小さくて食べにくい」といった消費者や取引先の懸念を払拭するため、「砂川天然大和しじみ」と題したパンフレットを作成し（図 12）、鮮魚店などへ配布して一般消費者へ積極的にアピールした。

図 12　ＰＲ用のパンフレット

また、ノボリや法被も作製し（図 13、図 14）、ただのシジミではない、大粒でおいしい「砂川天然大和しじみ」の独自性を訴求した。

図 13　ＰＲ用のノボリ

図 14　ＰＲ用の法被

シジミや干潟に関心を持つ層を増やすためには子どもの頃の原体験が最も重要であるとの考えから、20 年以上前から地元の豊川小学校および河江（ごうのえ）小学校の児童を招きシジミ獲り体験会を開催している（図 15)。これに加え、令和４年からは南陵高校の生徒と地先の環境改善活動を共同で行うなど､活動の幅を拡大した(図 16)。

「やれることはすべて実行する」という姿勢で取り組みを実施した。

図 15　シジミ獲り体験会の状況

図 16　高校生参加の環境改善活動状況

（５）　まとめ

これらの複合的な取り組みの結果、シジミ資源はＶ字回復し、それに伴い一般開放への来場客数も回復した。昨年度は、過去 10 年間で最も多くのお客様で賑わった（図 17)。

また、令和に入り一時期 100 万円まで落ち込んだが入漁料収入も、令和６年度には実に 1, 000 万円を突破し、驚異的なＶ字回復を達成した（図 18)。

図 17　資源が回復した結果、賑わいを取り戻した
シジミの一般開放潮干狩り状況

図 18　V字回復した一般開放入漁料収入金額の推移
出典：松橋小川漁業協同組合決算書
漁業権収入等を一部含む

6．　波及効果

これらの取り組みにより、良い広がりが見られている。

一つは、砂川の豊富なシジミ資源が評判となり、他の漁業協同組合から放流用の親貝（母貝）として供給の依頼を受けたことである。これにより、砂川は県内のシジミ資源の拠点になりつつある。

もう一つは、砂川シジミの美味しさや干潟の素晴らしさが口コミで広がり、環境ＮＰＯ法人との連携が実現し（図 19）、新たなイベントを開催したことである。「砂川シジミ復活プロジェクト」と題し、小中学生とその親子 120 人を招き、環境学習、ゴミ拾い、シジミ採り体験、生物観察会を合同で開催するなど、取り組みの輪が拡大している。この模様は新聞でも取り上げられた。

図 19　ＮＰＯ法人との連携が掲載された新聞記事

７．　今後の課題や計画と問題点

（１）　組合員への負担増大

第１の課題は、一般開放は前日までの準備や後片付けを含め、運営が多大な労力を要する。炎天下での交通整理、受付作業、昇降口の誘導、計量や洗い場の順番整理など、作業量は膨大であり、高齢の組合員にとって大きな負担となっている。

発表者（担当者）は主に受付を担当するが、数百人もの来場者が列をなして催促するため、大きなプレッシャーを感じている。業務が多忙を極めるため、水分補給の時間さえ確保できない状況である。

図 20　受付の順番待ち状況

図 21　受付状況

（２）　漁業収入の確保と流通対策

第２の課題は、本業である漁業としてのシジミの水揚げ量が極めて少ない点である。

一般開放による入漁料収入は組合経営に貢献するものの、漁業協同組合として、組合員一人ひとりの漁業としての水揚げ収入を確保する必要がある。

しかし、高齢化により堤防の階段の昇り降りさえ困難な組合員もいるため、重労働であるシジミの採貝を担う人材が不足している。

この課題に対し、県に仲介を依頼し、八代共同魚市場の運営者である「八代鮮魚商協同組合」と交渉を行った結果、組合単位での買い上げ・販売が実現することとなった。令和７年４月より出荷を開始しており、組合として定期的にシジミを出荷するのは初めての試みであり、大きな前進であると認識している。

また、流通関係者からの意見を反映し、品質とサイズのアピールを兼ねて、出荷サイズの管理に着手した。組合でユリ目（選別機）を購入し、令和７年６月からは現場で 4.7 分（約 14.2㎜）以上の大きさに選別して出荷することで、他県産シジミとの差別化を図っている（図 23）。

図 22：左　組合員による漁獲状況
図 23：上　サイズ選別状況

8．最後に

近年の子どもは、自然に触れ合う機会が極めて少ないと考える。一般開放では、子どもたちはシジミを獲る活動以上に、夢中で干潟とたわむれて遊んでいる（図 24）。

このような体験を通じて、五感で海・川・自然の大切さを感じてもらい、将来にわたって私たちの「良き砂川」を次の世代へつないで欲しいと切に願っている。

一般開放の運営は多大な労力を要するが、このような思いを胸に今後も活動を継続していく所存である。

図 24　シジミを獲ることよりも干潟とたわむれて夢中に遊ぶ子ども